

お姫様の護衛になった 男の話

飛騨三位

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すれ違いラブコメを書きたかった。まだまだ実力不足。
完結済み。

目次

日記①	1
日記②	20
プリンセスの胸の内	27

日記①

今日から日記という物を書いてみることにする。

俺はしががない国の一兵士だ。元々は農村の生まれだったが、三男だった俺は家を継げない為、仕方なく街に出て兵士になった。

兵士とは戦う仕事だ。戦争で人を殺したり、危険な魔物を討伐したりする。

俺はそのどちらも好きじゃないし、得意ではないが、食う為には我慢してやらなくてはならない。

どうにか死なないように、訓練は真面目に、仕事は程々に頑張るとしよう。

とはいえ、戦争なんて永らく起きてないし、魔物は冒険者達がいる。そう心配することもないだろう。

そういえば、今日で俺が兵士になってから三年が経った。毎日の訓練は辛いけど、最近では自分の実力が上昇していると感じられて、兵士も中々悪くないと思えるようになってきた。

街を見回り、訓練をして、夜は仲間と酒を飲み、たまに歓楽街へと躍り出る。そんな日々がどうしようもなく楽しい。

そういうえば、どうも最近魔物が活性化しているらしい。俺達兵士に番が回ってくる前に、何とか冒険者達に頑張ってもらいたいものだ。

明日はどうやら、城のお姫様が城下にお忍びで遊びに来るらしい。陰ながら護衛するように上から命令が来た。

城の中にはありとあらゆる娯楽があると聞いていたが、何でわざわざ遊びに来るのかね？貴族サマ方の考えることはよく分からない。

まあ、程々にやるとしよう。

空白のページ。

今日は色々あったが、取り敢えず昨日の日記の続きというか、昨日あったことを書くと思う。

誰に見せる訳でもないが、こういうのはしつかり書いた方がいいだろう、多分。

昨日、お姫様のお忍びショッピングを一般人に紛れて遠目から警護していた俺は、屋

根の上にいる怪しげな人影に気が付いた。黒いローブを纏った、見るからに怪しいヤツだ。

一瞬護衛の魔術師か何かかと思つたが、それならば俺達に知らされているハズ。

なのにそいつは、部外者が知る由もないお忍び中のお姫様をじつと見つめていたのだ。

人の注意は上に向きにくい。近くでお姫様の家族を演じている近衛達も気が付いていないようだった。

どうしようかと考えていると、そいつがお姫様に向かって人差し指を向け魔法の詠唱を唱え始めたのが見え、焦つた俺は、咄嗟に「屈め」と大声を出しながら、姫様の前に駆け寄り、立ち塞がって剣を抜いた。

その時、やつは既に魔法を発射しており、細く鋭い風の槍が俺の目の前に迫つていた。剣で魔法は防げない。うちの隊長は出来たが、少なくともひよつこの俺にはそんなことは出来ない。

しかし、その時の俺は剣の腹をそこに合わせ、さらに自分の腹を肉壁にすることによつて防ぎ切り、屋根上の魔術師に向かって剣を投げつけて殺したのだという。

正直、自分にそんな芸当が出来たのかは疑問だ。

そもそも、これは居合わせた同僚から聞いた話で、その時の事はいまいち覚えていな

い。

目の前で自分より小さな少女が（と言っても4歳差だが）死ぬかもしれないと思って必死だったし、俺自身結構な傷を受けて、気絶してしまったからだ。

因みに、その時の怪我はお姫様がその場で回復魔法とやらで治してくれたらしい。聞くとところによると、王家の血筋の中でも一部の才能ある人間しか使えないモノだそう
だ。

お伽噺なんかに出てくる奇跡のようなモノ、隊長は言っていたが、それを俺なんかに使って良かったのだろうか。

まあ、そのせいで今日は忙しかった。

普通に目を覚ましたと思っただら城の中の救護室で、その後すぐに謁見の間に通された時の緊張といったらなかった。

記憶が曖昧だったのもあって、酔っ払って何かやらしたのかと考えたくらいだ。

その後、お姫様に御礼を言われたり、近衛にお礼を言われたり、王様に褒められたりして、酷く恐縮したものだ。

そして、あの時の状況についても色々聞かれた。

どうにもあの場での魔術師を認識していたのは俺だけだったらしく、その原因が分からないらしい（実力者になれば魔力の隆起で魔術師の位置は感知できるし、上を警戒

している人間もいた)。

俺としては、何故感知できたかと言われても困ってしまう。本当に目に入ったただけからだ。

一応、分かる事は全て話したが、参考になるとは思えない。

ああ、そういえばその内褒賞がもらえるらしい。隊長に希望を聞かれたので、金、と答えると、「お前は本当に現金な奴だな」と苦笑された。

金の為に兵士をやってるんだから、別に普通じゃないのだろうか。

とんでもない事が起きた。俺がお姫様付きの護衛に抜擢されたのだ。朝、隊長に王宮へ向かえと言われたらこれだ。どうなってるんだ。意味が分からない。

説明を聞いてきた。どうやらあの時、敵の魔術師は新たに開発された幻惑という魔法で周囲の認識を欺いていたらしく、現状対抗策が乏しい魔法だが、俺の眼はそれに影響されずに物を見ることが出来るらしい。

どういう意味かはよく分からないが、俺の眼が特別ということらしい？

まあ、とにかく、俺はお姫様を護衛するのに無くてはならない存在なんだとか。

早速明日から王宮へと来るように言われ、住居も王宮内の兵舎に移動だという。何もかもが、あまりに唐突だ。俺はこれからどうなるんだ。

やっと荷物が運び終わり、取り敢えず日記を書くことにする。それにしても近衛の騎士が手伝ってくれて助かった。今日から同僚になると言っていたが、いい奴そうでなによりだ。

もう一人の同僚の魔術師の女は俺を見て露骨に嫌そうな顔をされた、俺は何かしたのだろうか。

今日からの俺の仕事は、護衛、ではなく索敵。

お姫様の周りや王宮内で怪しい人間を見かけたら、同僚の二人に伝えるのが俺の役割だ。

近衛とかいうエリート集団に混じって戦うのだと考えていたので、何だか拍子抜けだが、割と重要な仕事らしいので、程々に頑張ろうと思う。

おい！歓楽街に行けないなんて聞いてないぞ！給料が上がって金があっても使いどころが無いじゃないか！

せめて王宮の外で遊ばせてくれ！

性欲は運動欲へ。訓練をすれば少しは気が紛れる。お姫様が庭で日向ぼっこしている間に剣を振っていると、近衛騎士が途中から混ざってきた。

数回試合を行ったが、流石近衛騎士。圧倒的なレベルの違いを感じさせられた。何度斬りかかっても俺の剣は防がれ、何度も致命打のチャンスを見逃された。

そんな感じで良いようにあしらわれ、嫌がらせかと恨みを込めて近衛騎士を睨んでみたが、何を勘違いしたのか奴は爽やかに笑い返してきた。

悪意の無いその笑顔に、酷く惨めな気持ちになった。

お姫様はずっと俺達の様子を見ていたが、終わった後「兵士さんの方が近衛さんより強そうですね」と無邪気に笑っていた。

俺の方が筋肉があるし、ずっと攻撃をしていたからそう見えるのもムリは無いかもしれない。

近衛騎士が「精進します」と真面目そうな顔で一礼したので、俺も一応「ありがとうございます」と返しておいた。

それを見ていた女魔術師は鼻で笑っていた。嫌な女だ。

ここに來てから、仕事中に言葉を発する事がかなり減った。

お姫様の前で失言したら首が（本当に）飛ぶし、俺以外の二人は立派な出自の優秀な人間達で、俺みたいな農村の三男と話が通じると思えないからだ。

話さなくても、必要な事さえやれば仕事は出来るのだ。

適正距離の人間関係があれば、近づく必要は無い。

まあ、それでも何故かお姫様だけは頻繁に俺に話しかけて来るが。

我慢には限界というものがある。俺は近衛騎士に直談判して、明日、半日だけ外出の許可を貰った。半日もあれば俺の魔法の杖で魔法の壺の中に水魔法を放ってくるには十分。

自慢じゃないが、俺は詠唱速度が早い方なのだ。

護衛という名の監視が付いているのは想定外だったが、逃げる気は無いので問題ない。

溜め込んでいた金も用意したし散財の用意は完璧である。

落ち着け、状況を整理しよう。

始まりは、そう、俺が歓楽街で魅惑の双丘に顔を埋めていた時の事だ。突然、外の方から爆発音が鳴り響いた。

ただ事ではないのはすぐに分かった。俺は腐つても兵士だ。すぐに服を着替えて道へと出た。

そこは惨状だった。

通りは逃げ惑う人々と炎に覆われ、俺の監視役に就いていた筈の護衛は、王城へ向かったのか既に居なくなっていた。

夕焼けに染まる王城からは、黒い煙がいくつも上がっていた。俺は急いで向かおうとしたが、群衆に紛れて逃げている、一人の少女が目に入った。

見間違えるはずも無い、姫様だ。

姫様に声を掛けると、彼女は一瞬驚いたような顔をしたが、俺だとわかるとすぐに安心した様な表情をした。どうやら幻惑魔法とやらを使っていたらしく、正体がバレたのかと焦ったらしかった。

近くには女魔術師の姿もあり、王城が何者かに襲われ訳も分からず逃げてきたのだと言う。更に最も戦闘力の高い近衛騎士は敵を足止めするためにいまも王城の中におり、合流出来るか怪しいらしい。

つまり今は王の安否も分からない、誰が敵かも分からない、そんな状況だ。

何とか近くの村までは逃げて来られたが、ここは避難してきた人々でごった返している。その全員分の食事など無いし、寝る場所も無い。魔術師はお姫様の身分を明かして

助けを求めようとしたが、こんな状況では危険を増やすだけなので止めさせた。

しかし、温室育ちの二人にこの状況は耐えられまい。まあ、魔術師はともかく姫様は長く続かないだろう。

毎日風呂に入るような彼女を、こんな血と汗にまみれた、俺でも気分が悪くなるような場所に置く訳にはいかない。

ここからもう少し北へ森林街道を抜ければ城壁都市と名高い副都がある。王都には戻れないかもしれないし、あそこならば同様の攻撃を受けたとしてもそう簡単に落ちたはいいまいだろう。

ただし、馬ならば辿り着くまでに五日程の旅路になるだろうが、それでも、ここにいくよりは遥かにマシだ。

幸い、俺には狩りの心得もあるし、野営訓練も積んでいる。マジックポーチにもある程度の道具も入れてあるから、姫様だけならどうにかなるだろう。

魔術師は……姫様と一緒にもう寝てしまったか。まあ、肉体的にも精神的にも疲れただろうし、仕方がない。相談は明日することにする。俺も一応仮眠を取っておくとしてしよう。

明日からは姫様の体調なども記録しておこう。俺は医者ではないが、何かの時役に立つはずだ。

目を覚ました二人に北の城壁都市へ向かうことを相談すると、魔術師が躊躇ったものの姫様がOKを出したので早速出発することになった。

と、ここで問題が発生した。馬が一頭しか手に入らなかったのだ。それも背が小さく馬力も無い馬だ。

どうやら昨日避難民達が多くを馬を殺して食べてしまったらしく、村が売れる馬はこれ一頭のみになってしまったのだという。

というかこの一頭を手に入れるのも相当渋られたので、本当に苦しいのだろう。

馬は農業にも移動にも便利な生き物だし、仕方の無い事だ。

取り敢えず姫様だけは馬に乗せたものの、徒歩で城壁都市へ向かうことになってしまった。

徒歩となると三週間はかかるかもしれない。姫様だけならどうかしてみせるが、魔術師もとなると、さすがに二人の面倒は見きれない。自分で何とかできる女である時期待しておく。

・姫様の体調だが、ぐっすり寝たせいとかすこぶる良さそう。 「馬が手に入らなかったのが旅が長くなりそうです」というと、「兵士さんと旅出来るならどんなに長くても平気です」と笑顔で言われた、本当は不安で堪らないだろうに、健気なものだ。

それを見て魔術師が憎々しげに睨み付けてきたが、別に俺が言わせた訳じゃないのだから、勘弁して欲しい。

村を出て四日目。森林街道の旅は順調ではない。姫様は馬に乗りすぎて尻を痛めたとし、魔術師は早くも弱音を上げ始めた。食事や水に関しては俺が調達しているので、問題無いのだが。

取り敢えず姫様は俺がおんぶして、魔術師を馬に乗せ、進むことにした。

姫様が思っていたより遥かに軽かったので、そこまで負担は無い。魔術師の視線が厳しいものになっているのがとても気になるが、身分差を気にしている状況では無いのだ。

というか、魔術師は全くと言っていい程役に立っていない。彼女は炎の使い手だが、まさか木々の生い茂る森林街道でそれを使わせる訳にはいかないの（使おうとしていたが）、今の彼女は体力の無い一般人である。

・姫様は尻を痛めている。長時間不慣れな乗馬をさせた俺の責任だ。初心者が馬に乗ると尻の皮が剥けたりするから、結構痛い。

ちなみに俺のおんぶは割と快適だったようで、「明日も、ぜひ！お願いします！」と言われた。おんぶもおんぶで付け根とか痛いと思うのだが。

というか姫様は回復魔法があるから、尻の痛みなどすぐに治せるのではないのだろうか。

そう言うと、姫様は回復魔法は何度も使えるものじゃないから本当に必要な時の為に節約すべき、と言っていた。もつともである。

十日目。森林街道の景色はもう見飽きてきた。看板を信じるならば城壁都市まで後半分程、少しだけ気が減入る。

魔術師はもう疲労困憊で完全に馬にぶら下がる荷物と化しており、仕方が無いので俺が馬のたずなと姫様の手を引いて歩いている。

魔術師は置いてくるのが正解だった。本当に役に立たない。ここ四日間の日記の記述もそんなことを書いてる気がする。姫様の方がしつかりしているのは、本当に護衛としてどうなのだろう。

言っても仕方ないが、というか言ってはいるが、それでも愚痴りたくもなる。

・数日前から書いているとおり、姫様は最近自分で歩くようになった。言い方が何かおかしいが、おんぶでもなく馬でもなく、自分の足で歩くようになった。

しかし、俺の歩調と姫様の歩調は随分と違うらしく、気が付くと姫様を置いていきそうになるので、昨日からは手を繋いで歩いている。

こうすれば、姫様の歩調に合わせて動きやすくなるし、剣を抜きにくいのは難点だが、姫様に注意を払わなくても良い分、辺りを警戒できる。

もちろん平民と王族が手を繋ぐなどしていい事では無いが、俺にそう言った感情は全く無いし、まさか姫様にも無いだろうから、問題無いはないだろう。というかこれ、書かない方がいいのではないか。

くそ。魔物に襲われた。姫様は無事、魔術師も無事だ。何とか洞窟に逃げ込めたが、馬を失った。

姫様は無事と書いたが、受けた傷を回復魔法で治したから無傷と言うだけだ。俺にもっと実力があれば、そう、近衛の騎士のあいつなら守りきれたのかもしれない。

魔物にやられた左腕が痛む、まともに剣も握れない。姫様の回復魔法は十日に一回しか使えないから、治してもらうことも出来ない。

十日待つて俺が回復してから進むか、明日にでも出立するか。こんな森の中ではどちらが安全かもわからない。

ああ、眠い。眠ってしまいたい。血が足りていないのか。

・姫様に怪我也異常もない。ただ、自分のせいで俺を怪我させたと酷く落ち込んでいるようだ。

姫様が自分に回復魔法を使用するまで怪我を隠しておいて良かった、隠しておかなければきつと俺に使っていただろう。

（乱れて力の無い筆跡で書かれている）

インクも少なくなってきたので端的に書くことにする。

姫様は無事だが、魔術師が死んだ。俺も無事とは言い難い。

あと少しで城壁都市だ。

城壁都市に到着した。と言っても昨日のことだが

。聞いたところによると王都を襲ったのは魔族らしい。あのお伽嚙に出てくる魔族だ。奴らは二十日前程に人間に宣戦布告してきて、各国は協力して魔族に対抗するようだ。

この城壁都市も熾烈な魔族の攻勢に晒されたようで、兵士達もかなり疲弊しているよ
うに見受けられる。王都と違い、落ちなかつただけ十分だと思いが。

そういうえば王族は姫様を残して死に絶えたらしい。恐らく城に残った近衛騎士も無
事ではないだろう。姫様もまだ十六歳だろうに両親と近しい者達いっぺんにを失うと
はな。

今、姫様を護れるのは俺だけだ。頑張らねば。

領主達と色々話し合いがあった。よく分からんが、この城壁都市は隣国の領地になるらしい。そして姫様には王族としての地位を捨てて貰い、一般人になつて欲しいのだから。

なんだか無礼な話なような気がしたが、姫様はそれを了承した。こうすることが、人々の為になるんだそうだ。

何かの契約書のような物にサインが終わつたあと、姫様、と呼ぶと、「私はもう姫ではありません」と言われた。

平民になつても姫様は姫様だと思ふのだが、姫様的には名前と呼ぶべきと考えているらしい。試しに本名で呼んでみると、姫様は嬉しそうに笑つて「初めてあなたに名前と呼ばれました！」と言つていた。名前を呼んだのの何が嬉しいんだろうか。

平民になるということとは金を自分で稼ぐ必要があるという事だ。領主の紹介で俺は兵士の仕事に就き、姫様は病院で働き始めた。

病院へと向かう姫様はどこか活き活きとしている。毎日が新鮮で発見に溢れているらしい。

強いお方だ。

今日、姫様に泣きつかれた。仕事が終わって、姫様と暮らしている家に帰ってくると、いつもなら寝ている姫様が起きて待っていたのだ。

姫様は俺が部屋に入るなり、抱きついてきて、俺の胸に顔をうずめて泣き出した。俺は混乱したし、姫様から訳を聞きだそうとしたが、姫様は泣いたまま俺から離れなかった。

俺はどうすることも出来ずにそのままお嬢様を受け止めていたが、少ししてから顔をうずめたまま姫様が「あなたは、私の何ですか？」と聞いてきた。

俺は素直に「あなたの護衛です」と答えたが、お嬢様は「今の私は姫ではないですし、あなたを雇っている訳でもありません。どうして私を助けてくれるのですか？」等と言いつつ出した。

俺はそう言われて少しムツとした。俺が金と身分の為に、ここまで姫様を護ってきたと思っただろうか。

「俺はあなたが姫だから護っているんじゃないやありません。あなたという少女をあの二人に託され、何よりも俺があなたを護りたいから護っているんです」

俺は少し声を荒らげてそう言った。

姫様が俺の事を信頼しきれていなかったことが悲しくて、悔しくて、彼女の体を強く抱きながら、そう言った。

思い直せば彼女は思い詰めていたのかもかもしれない。周りの人々が死に、頼れるのは俺一人。しかし、その俺だって『護衛』だから自分について来てくれるだけで、今の自分は『姫』ではなく、俺に報酬を払うことも出来ない。

いつかは置いていかれるのではないか、いつかは捨てられるのではないか、そんな不安と恐怖が少しずつ溜まっていたのだろう。

姫様はその後、何も言わずに俺に抱きしめられていた。

そして、少ししてから姫様はゆっくり俺の腕から離れ、「ありがとう」と言い残して自分の部屋に戻っていった。

強いといっても、元王族だと言っても、姫様だって一人の人間なのだ。なぜ忘れていたのだろうか。

「支える」という言葉の意味を理解しきれていなかったということか。

まあ、でも、これで伝わったろう。

抱きしめる必要はなかったが。

日記②

あんな事があつてから、姫様の顔に少し差していた影が消えた気がする。もちろん、悩みが無くなったわけではないだろうが、少しは心の支えに成れたと思いたい。

最近料理にも興味を持ったらしく、近所のおばさんや病院の同僚に教わっているようだ。

味は、まあ、美味しいと思えば問題無い。食べられる。

成果はともかく、趣味を見つけるのは良い事だ。

それに、もし、彼女が結婚相手を見つけた時に、何も出来ない元お姫様では困るだろう。出来る事は多い方がいい。

まあ、彼女が誰かと結婚する姿なんて想像も出来ないが。

俺もいずれは結婚相手を見つけないければな。

今日は久しぶりに娼館に行った。いつも一つ屋根の下で姫様のような美しい少女と暮らしているのだ、偶には処理しないと爆発してしまう。

そんな感じで、昼飯代の余りを貯めた金を持って、仕事の帰りに安い女を抱いてきた。

そういえば、姫様に会う前はこんな生活を送っていたな。

思えば、あの頃が最も幸せだった。

何も気負うことなく、毎日を気ままに生きる自由は簡単なようで得難い。

今の生活に不満がある訳ではないが、少しだけあの生活に未練はあるかもしれない。
隊長達は無事だろうか。

今日は姫様に怒られた。誰かに俺が娼館に行ったことを聞いたらしい。

そういう事に金を使うべきではない、と言われたので、俺は娼館の金が節約して貯めたものである事を説明した。

しかし、姫様は「そういう問題じゃありません！」と泣いて部屋に籠ってしまった。

あの魔術師が潔癖気味だったし、お姫様もそういう事は苦手なのかもしれない。

その後、晩飯の時間になってようやく部屋から出てきた姫様は、席に着くなり「娼館ではなく、私ではいけませんか」とか言ってきた。

良いわけないだろう。そんな事したら、姫様を守って死んだ人達に申し訳が立たない。

流石に「そんなに娼館が嫌ならもう二度と行かないので、そんな自分を捨てるような事を言わないで下さい」と謝まると、姫様は「はい……」と少し悲しそうに頷いてくれ

た。

もともと頻繁にいける訳ではなかったが、これからは他の発散方法を考えるところ。

最近はずっと姫様が自分のことをよく話すようになった。これまでは大抵、俺が話し手で姫様が聞き手だったのだが、最近はその逆になる事が多い。

王族だった頃はずっと王宮の中でつまらなかつたのだ、魔術師には姉のように接してもらっていたのだ、近衛騎士は幼い頃から守ってもらっていたのだ、話し方は要領を得ないが、興味深い話が多い。

そして、姫様は話が終わると、決まって「私の事、分かりましたか?」と聞いてくる。そこで、俺はいつも「はい」と答えるのだが、何故か毎回「いいえ、まだ足りません」と言われてしまう。

まあ、まだ出会って二年だ、焦って理解する必要は無いのかもしれない。

勇者と呼ばれる人間の精鋭達が魔族達の王を討伐したらしいが、戦争のせいで住処を追われた魔物達が入りに降りてくるせいで最近はずっと忙しい。

鍛錬の成果もあつてか、流石に苦戦することはないが疲労というのは貯まるものだ。

油断していた仲間を守ろうとして怪我を負ってしまった。

結構深い怪我で、病院に行くに姫様が手当をしてくれた。姫様は怪我をした俺を見るなり泣きそうな顔になったが、命に別条は無いと知ると酷く安心していた。

回復魔法でぱぱと治して欲しかったが、昨日使ったばかりで当分使えないらしい。

まあ、魔物も一段落してきたし、問題ないだろう。

そういえば、制服姿の姫様は美しかった。

姫様ももう十八、そろそろ見合いでも持つてくるべきだろうか。隊長に相談しよう。

見舞いに来てくれた隊長に姫様の事を相談すると、隊長は何か考え込むような表情を見せた後、お前はどうかんだ、と聞いてきた。

確かに俺もいい歳だが、姫様が伴侶を見つけるまでは誰とも結婚するつもりは無い。そう答えると、隊長は更に難しそうな顔をして「そうか、分かった」と言つて帰つていつてしまった。

人の心の機微に聡い隊長の事だ、いい相手を探してくれるだろう。

もし変な奴だったら俺が

隊長が姫様に話を聞いてきたらしい。

珍しいこともあるようで、隊長が勧めようとしていた男と姫様が好きな男は一緒なんだという。

姫様に好きな男がいるとは知らなかったが、彼女だってそういう年頃だ、ない方がおかしい。

その男は隊長からしても信用できる奴で、姫様にとつてもこれ以上無いほど申し分ない相手らしい。

詳細は教えてくれないが、隊長がそこまでいうなら、と賛成しておく。

後は相手次第だが、「うちの姫様を断るような奴は俺が叩き切ってやる」と言うと、隊長は難しそうな顔で「そうか」と呟いていた。

冗談ですよ？

相手側が結婚を了承した。もともと姫様と親交があつたようで、すんなりと決まったそうだ。

姫様から男の話なんて聞いたこともなかったが、まあ、そういうことなのだ。

式は来週になるらしい。奇しくも俺の退院日と一緒だ。

それにしても姫様の結婚式か、そう考えると少しだけ感慨深いものがある。

俺の元を離れて誰かと共に生きていくというのは少し不安だが、別に俺は親でも何でもない、姫様を守る護衛なのだ。本人が結婚したいというなら、それを応援するのが普通なのだ。

いい加減、相手の名前くらい教えて欲しいが、隊長曰く「言ったら、そいつは逃げ出すだろう」とのこと。大丈夫なのかそいつ。

ここ最近、姫様を見ていない。結婚の話が出てからか。結婚が決まったら、俺は必要無いということだろうか。少し悲しい。

日記というものは、書きたいことがあれば書く。書きたくなければ書かない、そういうものだ。

退院まであと五日、姫様の結婚まであと五日。

今日も誰も見舞いにこない。姫様の顔が少しだけ見たいが、結婚式の準備があるのだらう。

(空白のページが続いている。)

いよいよ、明日が姫様の結婚式だ。俺の脚もほぼ完治したと言っている。護衛として最後の仕事だ。

プリンセスの胸の内

彼を初めて見たのは、まだ私が『お姫様』だった時でした。彼は突然目の前に現れ、誰も気が付かなかった魔術から体を張って、私を守ってくれました。

その時のことは鮮明に焼き付いています。

私は血を見るのも初めてで、命を狙われたのも初めてで、それこそ腰が抜けるくらいに、怖くて、恐ろしくてたまらなかった。

「へ、へ、大丈夫、夫、です、か？」

ですが、彼は私を見て、笑って聞いてきました。私より痛いはずなのに、私より怖い目にあつたのに、笑って。

その時偶然、回復魔法が使えるようになったのは本当に運が良かったと思います。

私のわがままで街へ遊びに来たのに、そのせいで誰かが死ぬなんて、きつと私には耐えられませんでしたから。

彼が治った後、お礼を言いに行くと「仕事ですから、お気になさらず」と彼は言いました。

その時の彼の顔は誇るのでも無く、疲れたふうでもなく、本当にそう思っているよう

で、私は彼に興味を持ったのを覚えています。

次に会ったのは、彼が護衛として私に仕えることになった時。

近衛騎士さんは彼を歓迎しましたが、いつも私に色々なことを教えてくれる魔術師さんは、平民である彼が私に近付くことをとても嫌がっていました。

でも、私が頼んで決めたことだったので、文句は言ってませんでした。

私は彼といろいろな話を話したかったのですが、彼は余り私とお喋りをしようとしませんでした。

必要最低限の連絡を近衛騎士を通して行うくらいで、全く近寄ってこないのです。

出来るだけ話しかけるようにはしましたが、彼はどこか『お姫様』に遠慮しているようで、大した話は出来ませんでした。

魔術師さんが「平民と我々に共通の話題なんてありません」と言っていたように、彼も同じ気持ちだったのかもしれない。

ですが、そんな彼との壁が崩れる日がやって来ました。

そう、魔族による王都襲撃です。

建物が燃え、人が倒れ、混乱と恐怖に街が包まれる中、私達は彼に導かれ城壁都市を目指すことになりました。

森林街道の旅路では、彼が珍しく自分から色々な話をしてくれました。

生まれのこと、剣のこと、お金の事、昔の事。

それらは私にとつてどれも新鮮で、不安に塗れた旅での中、彼の話を聞いている間は、嫌な事を少しだけ考えなくてすみました。

きつと彼もそれが狙いだったのだろうと、今は思います。

それだけに彼が怪我をした時は不安でたまりませんでした。

もし治らなかつたら？このまま彼が死んでしまつたら？そう考えただけで、息が苦しくなりました。

……思えばこの頃から彼の事を想っていたのかもかもしれません。

その時は回復魔法を自分自身に使つたばかりで、包帯くらいしか手当が出来ず、私は不甲斐ない自分自身を呪いました。

私がつつとしっかりしていれば彼が怪我を負うこともなかつたのに、私がつつと回復魔法を使いこなせれば、と。

ですが、そんな時も彼は笑っていました。

「姫様を送り届けるまでは死にませんよ」という言葉が本当に頼もしかった。

魔物の襲撃で、魔術師さんが死んでしまった時などは、子供みたいに泣く私の横でずつと頭を撫でてくれました。子供をあやす様な、そんな撫で方でしたが、不思議と心

が安らいだのを覚えています。

城壁都市に到着すると、私はお父様達の死亡を知らされ、王族が一人でも残っていると隣国の属国になるのに不都合があるから、身分を捨ててくれないかと領主様に頼まれました。

彼はその要求を聞いて怪訝な顔をしました。それが無礼な話だと考えたのでしよう。ですが、私はそれを了承しました。

元々私は、王族とは名ばかりの側室もどきの子供で、回復魔法を使えるようになってまともに王族として扱われ始めたくらいだったので、王族という肩書きに興味はありませんでしたから、特に気になりませんでした。

紙にサインをすると私は『お姫様』では無くなり、彼が敬称付きとはいえ名前で呼んでくれるようになりました。

身分を捨てた理由を、彼には「民のためです」と言ったのですが、本当は『お姫様』の肩書きを捨てることによって彼と対等になりたいという気持ちの方が大きかったのです。

私と彼にはひとつの小さな家が領主の方によって宛てがわれました。

家族も、家も、大切な人も、殆どを失った私ですが、彼と一つ屋根の下で暮らせるという事実が、暗い気持ちを和らげてくれました。

一緒に暮らすことが決まると、彼は言いました。

「平民になったからには、あなたも働かなくてははいけません」

「お金、ですか？」

わたしが首を傾げると、彼は驚いたような顔をしつつ説明してくれました。

どうやら、平民として生活するには働いてお金を手に入れなければならぬらしく、彼はいくつかの候補を私に提示してくれました。

私はその中から迷わずに病院を選びました。何故なら彼が、城壁都市の兵士になると言ったからです。

彼はきつとまた、誰かの為に無茶をするに決まっていますので、私が支えてあげないといけません。

病院ならば、彼が怪我をしても、傷付いても、私自身が看病することができますから、選ばない理由がありませんでした。

そんな動機で働き始めた病院ですが、想像していたよりもやりがいのある仕事でした。

人を助けるというのは、人に助けられ続けた私にとってとても新鮮な体験で、友人もでき、毎日に充実というものを感じました。

また、彼も良い同僚に恵まれたようで、帰ってきてからはよくお互いの職場の話をする

るようになり、初めて私は彼と一緒になれたと実感しました。

ですが、友人や周りから世間を知って、私は思うようになりました。

「何故彼は私と一緒にいてくれるのだろうか」という疑問です。

今の私は、『お姫様』でもなければ、彼の雇い主でもありません。

彼が私と共にいる利点は何も無く、むしろ負担が増えるだけ。

何故？ どうして？ 考え始めると、止まりません。

彼の顔を見る度にそれは強まり、あろうことか私は彼にあたってしまいました。

失礼な事を言っただと思えます。情けない事を言っただと思えます。

「私は、あなたを守りたいからここに居るのです」

でも彼は、そう言っただけ私を受け入れてくれませんでした。

『お姫様』ではなく、ただの『私』を、彼は大切だと言ってくれたのです。

私の中に渦巻いていた色々なものはそれだけで無くなり、彼に抱きしめられた時、私は自らの想いを自覚しました。

私は彼にすっかり恋をしてしまっていたのです。

しかし、だからといってどうすれば良いのかは知りません。

でも、このままの関係性をずっと続けていては、誰かに取られてしまうかもしれませんから、なにか行動を起こそうと思いました。

こういう時、相談するのはいつも彼だったのですが、今回ばかりはそうも行きません。なので、病院の先輩に聞くことにしました。

先輩は私の相談に親身になって乗ってくれ、一つアドバイスをくれました。

「女を磨きなさい」

ここで言う女とは、容姿に限った話ではないそうで、先輩はさしあたって、料理や洗濯などの家事をこなせるように言いました。

その中でも料理の腕は絶対に必要だと言われましたので、私はレシピを貰ってその日から毎日晚御飯を作る役を引き受けました。

初心者ながらレシピのおかげか、彼からは中々好評で、先輩には感謝してもしきれません。

彼の胃袋を掴んできた手応えを感じ始めた頃、食材を買いに夕方の市場へ行くと、彼が「隊長」と呼んでいる兵士の方と出会いました。

向こうの方から私に気が付いて声を掛けて下さり、少しだけ世間話をしていると、彼が今日娼館へ行つたという話を聞きました。

娼館とは、お金を払って女の人達といやらしい事をする場所だそうで、まさか彼がそんな場所に行くとは信じられませんでした。

どうして、私がいるのにそんな場所に行くのでしょうか。私に言ってくれば、その、い

やらしい事の一つや二つくらい、別に構わないのに。

それとも、私では力不足と言うことでしょうか。

他の女の人の方が良いと、そういうことでしょうか。

うじうじと悩んでいると、彼が帰ってきました。心無しかいつもより機嫌が良く見え、なんだか嫌な気分になりました。

娼館に行つたのかを聞くと、彼は少し驚いたような顔を見せた後、肯定しました。

すっかり弱気になった私は、本当の気持ちは言わず、お金のことを理由に彼を責めました。もともと、私達にお金の余裕はそれほどありませんから、そこを突けば、もう行かないでくれると思つたからです。

ですが彼から返ってきたのは、お金は自分の範囲でコツコツ貯めたものだから問題ありません、という言葉。

自分がちゃんと言わなかったのが悪いのに、私はその返答に頭に來て、声を荒げて自分の部屋に籠つてしまいました。

そして、部屋の中で泣いて、後悔して、彼が晩御飯に呼びに來た時、ちゃんと本当の事を伝えようと決めました。

「娼館ではなく、私ではだめですか？」

私がそう言うのと彼は、飲んでいた水を吹き出す程に驚き、すぐに「ダメに決まってい

るでしょう！」と言いました。

私は泣きたくなりました。こんなにも勇気を出して言ったのに、無様に振られて、消えてしまいたいときえ思いました。

ですが、彼が次に言った言葉で、それが違う意味だと分りました。

「そんなに娼館が嫌ならもう二度と行かないので、そんな自分を捨てるような事を言わないで下さい」

彼は、私と自分とは自分が不釣り合いだと考えていたのです。

ですが、こうなると私の問題と言うより、私達の関係性の問題になってくるので、余計に難しくなります。

真面目で優しい彼の事です、私がいくら好意を伝えても、きつと子供扱いをして「他にいい人がいますよ」なんて言って、取り合ってはくれないでしょう。彼はどこまで行っても、私の保護者的な立ち位置であろうとするのです。

この壁を壊さない事にはどうにもなりません。

そこで私は彼にもっと自分の事を知ってもらうべきだと考えました。

私がかもう独り立ちのできる、彼と同じ大人であるということを示せば、「女」として見てくれるかもしれないからです。

彼の口から「もう大人になったのですね」、みたいな事を聞ければ完璧と言えるでしょ

う。

まあ、未だに聞けてはいませんが、効果はあったと思つています。

そんなある日、彼の仕事が随分と忙しくなつた頃、彼が重傷で病院に運び込まれてきました。

それを見た時は心臓が止まるかと思いましたが、命に関わるものではなく、安堵のため息を吐いたのは至極当然のことでした。

増えた魔物の駆除中に仲間を庇つて傷付いたようで、一週間程は入院が必要だということでした。

足に包帯を巻いていると、彼に白衣が似合っていると褒められました。

まあ、彼は褒めるだけで何もしてこないのですが、それでも嬉しいことに変わりありません。

彼が入院してしばらくして、お見舞いに来た隊長さんから、彼が私を結婚させたがつている、という話を聞きました。

確かに私も十八歳、結婚していてもおかしくない歳です。ですが、私は好きな人と結婚したいし、お見合いなんてしたくないと、隊長さんに告げると、彼との仲を聞かれませんでした。

私は、隊長は頼りになる、と彼が常日頃言っていたのを思い出し、全てを打ち明けて

相談しました。

すると隊長さんは、彼から私が結婚相手として申し分ないという言葉を取ってきてくれ、周りに根回しして、彼が理由をつけて私から逃げないように外堀を埋めてくれました。本当に感謝してもしきれません。

そうとなれば、後は私が彼に想いを伝えるだけです。

……もしかしたら断られるかもしれませんが、絶対に嫌だと、拒絶されるかも。でも、それでも、私が、言わなければなりません。

「で、相手のやろ……方はどこにいますか？そのツラ……もとい、ご尊顔を見ておきたいのですが」

結婚式当日、新郎、新婦控え室。そこに今、私と彼は居ました。

彼は若干のくまが残る目で、部屋を見回しています。一週間ぶりに会ったというのに、私には眼もくれず相手の男を探すなんて少し複雑な思いです。もちろん、私のことを心配してくれているのでしょうか。

そう、何時だつて彼は自分の事より私の事を守ってくれました。王都が落ちた時も、

魔術師さんが死んだ時も、私が……ただの少女になってしまった時も。

ですが、私はそんな彼が心配でたまりません。いつも自分の身を削って、人の心配ばかり。

この前の大怪我だって、誰かを庇つてのことだと聞きました。私を守ってくれたのと同じように。

「お話があります」

「……何でしょう」

私が真剣な声音で言うと、彼も居住まいを正してくれました。

彼の神妙な顔を見ると、今から何を言うのか、何を伝えるのか、それを考えて、心臓が激しく鳴るのを感じました。もし、の恐怖と、少しの勇気が胸を灼いています。

「もし、相手が居ないと言ったらどうしますか？」

「えっ?! 居ないんですか!？」

大声で彼が驚く。

そして、みるみる内にその顔が紅くなっていった。こんなに怒った彼を見るのは初めてで、少し怖いです。

ですが、隊長さんの言った通りです。

「奴の名前を教えて下さい、俺が引きずってでも連れてきます」

「名前は教えられません。実はその方は結婚に乗り気じゃなくてですね、私がいくらアプローチしてもものりくらりと躲けてしまふんです。酷いと思いませんか？」

「ゆつ、許せねえ、そんなやつは！切り殺して良いですか!？」

「斬りつ!?ダ、ダメですよ！そう、それでですね、ここまで準備はしたのに、断られたら私はとても悲しいです。二度と結婚なんて出来なくなるかもしれない」

「ここまで怒るとは思いませんでした。ええ、嬉しいですけど！」

「二度と!?!ご、ご安心ください！絶対に了承させて連れて来るのでしばしお待ちを！」

「絶対に?？」

「絶対に!！」

「言いましたね。」

「じゃあ私と結婚して下さい」

「はい?？」

瞬間、彼の動きが止まりました。

「相手なんて初めからいません。嘘です。でも、こうでもしないと、あなたは私の事など取り合ってくれないでしょう?？」

彼はしばらく動きを止めたまま、ぐるぐると目を動かしていましたが、少しして動き出しました。

「……嘘というのは、本当ですか？」

「はい、本当の嘘です」

「俺と、結婚したいというのは？」

「……本気で、本気です」

すると、彼はまたしばらく考え始めました。

「実は、あなたの結婚が決まって、俺も色々なことを考えました」

彼の口調は穏やかで、頭の奥から何かを引っ張り出すような印象を受けます。

「相手はどんな奴だろう、あなたはどんな気持ちだろう、俺も誰かと結婚するのかな、とか色々です」

「はい」

「ですが、そのどれも深くは考えませんでした。考えようとすると、何故か気分が悪くなつたからです」

「……はい」

「……でも、でも、今日。あなたのその、ドレス姿を見て思ったんです。ああ、どうして俺が隣じゃないんだろうな、つて」

「……っ、はいっ」

目頭が熱くなる。まだ、まだ、決まった訳では無いのに。暖かい、彼の声を聞いてい

ると。

「俺も貴方のことが好き、です。こんな俺で良ければ、どうか結婚して下さい」
「っ、喜んで、」

いつか『私』を見つけてくれたあの温度を感じながら、私は彼の背中を抱きしめた。
私を支え、与えてくれた人の、無防備な守るべき背中を。